

維新史 回廊だより

第2号
平成18年
(2006年)
11月発行
(年4回発行)

発行所 山口県環境生活部文化振興課

山口県山口市滝町一番一号 電話〇八三一・九三三二・二六二七

◇はじめに◇

「維新史回廊だより」を刊行したところ、遠方からもお問い合わせをいただきました。大変ありがとうございます。まだまだ、内容は不十分ですが、この事業を通じて、少しでも皆さんの幕末・明治維新への理解が深まればと願っています。

今回は、「四境戦争（第二次長州征伐）」を取り上げてみました。解説は、山口県文化振興課の上田資料調査研究員です。

◇維新にまつわる事件簿◇

四境戦争（第二次長州征伐） ～小瀬川口の戦い①～

○この戦いが四境戦争と呼ばれている理由を教えてください。

一般には、第二次長州征伐、征長の役、長州戦争などと呼ばれています。この戦いが瀬戸内海の四国との境「大島口」、広島との境「芸州口」、九州との境「小倉口」及び島根との境「石州口」の四つの国境で起こったことから、山口県では、「四境戦争」や「四境の役」などと呼んでいます。

今回は、この四境戦争の中から、芸州口における戦闘の発端となった、慶応二年（一八六六）六月十四日の小瀬川口の戦いについてご紹介します。

○どこと戦ったのですか。

朝廷から長州征討の勅命を受けた江戸幕府とです。幕府は歩兵隊等の直轄軍力を動員するほか、三藩に出兵を命じて征長軍を編制しました。

これに対して長州藩は、萩本藩、長府・徳山・清末の三支藩と岩国領の武士、奇兵隊をはじめとする諸隊や農兵隊を総動員して、これを迎え撃ちました。奇兵隊は、文久三年（一八六三）に高杉晋作が中心となって下関で結成されましたが、武士だけでなく庶民からも志願者を募り、洋式銃を備

え、厳格な集団訓練を実施して精強な軍隊となりました。この後、奇兵隊のようないわゆる諸隊が県内各地で編制され、幕末期の戦争で活躍しました。

○なぜ、幕府と戦ったのですか。

長州藩は、文久二年（一八六二）七月から、幕府が朝廷の命を奉じて攘夷（じょうい）を実行するように、朝廷・幕府の双方に対して働きかけをしていました。しかし、文久三年（一八六三）八月十八日、幕府との決定的対立を避けようとする孝明天皇の意向を奉じた中川宮と会津・薩摩両藩を中心にクーデターが起こり、それまで築いてきた政治的基盤を一夜にして失ってしまいます（八・一八の政変）。そのため長州藩は、武力を背景に朝廷に政策の変更を迫ろうと、世子毛利定広の進発上京を決定、元治元年（一八六四）七月十九日その先発部隊が京都に侵攻しますが、京都を守護する諸藩の軍勢に阻まれて敗走を余儀なくされました（禁門の変）。

この時御所に向かって発砲した罪により、長州藩は朝敵となります。長州征討の勅命を受けた幕府は、征長軍を編制して広島まで進軍しましたが、長州藩が禁門の変の責任者を厳罰に処すなどして恭順の意を示したので、十二月に至り兵を収めました（第一次長州征伐）。

この間長州藩内部でも、このような危機を招いた関係諸役人の責任を追究する動きが起こりました。尊王攘夷運動を推進した人物がことごとく



蛤御門（京都市中京区）に残る禁門の変の銃痕

更迭され、幕府への謝罪で事態を乗り切ろうとする恭順派が要路を占めると、尊攘派は厳しい弾圧を受けます。

このような状況下に、高杉晋作は、諸隊を率いて軍事クーデターを起こし、事態の打開を図りました。恭順派政府は追討軍を派遣しましたが、意気軒昂な諸隊軍の前に敗北を喫し、また萩城下でも鎮静会議員が事態收拾に動いたことから、恭順派政府は終に失脚します（元治の内訌）。この内戦を経た後の藩政府の採った政治路線は、朝廷・幕府の命令に従う態度を示しながらも、軍事力の再編強化を進める「武備恭順」というものでした。

一方で、朝廷・幕府内には、第一次長州征伐の撤兵決定直後から、長州藩に対する処分を不十分とする声があり、加えてこのような長州藩内の情勢変化を受けて、慶応元年（一八六五）九月、長州への再度出兵が決定されます（第二次長州征伐）。戦争回避の条件として示された幕府の処分は、禁門の変における藩主の責任を明確にし、領土十萬石を削封するなど、長州藩としてはとても受け入れ難いものでした。そしてついに慶応二年（一八六六）六月七日、幕府艦隊の周防大島への砲撃を皮切りに、十四日には芸州口、十六日には石州口、十七日には小倉口でそれぞれ戦闘が開始され、四境戦争の幕が切って落とされたのです。

○今回の舞台となった小瀬川口とはどのようなところですか。

征長軍の本陣が置かれた広島から、己斐・廿日市・大野・玖波を過ぎ、山陽道は小方で二つのルートに分かれます。苦の坂を越えて中津原から小瀬川へ渡り関戸を越える古くからの山陽道と、油見・大竹を経て小瀬川下流を和木村へ渡り、新港を通って岩国に到る海岸ルートです。前者を苦の坂口または中津原口、後者を大竹口といいます。

開戦当初、長州軍は安芸国と周防国の国境線になっているこの小瀬川を防衛ラインとしていました。征長軍は大竹口を大手、苦の坂口を搦め手と定めて進軍しました。六月十四日の戦闘では、この大竹口・苦の坂口がともに主戦場となりました。

○それぞれの戦力はどのくらいだったのですか。

小瀬川口の戦いにおける征長軍側の主力は、先陣を務める彦根井伊家と

越後高田榊原家の軍勢でした。両勢併せておおよそ三〇〇〇余人と報告されています。この戦いに備え、岩国領では武士・足軽・諸隊兵約七五〇人、農兵一〇〇〇人を動員し、萩本藩からは毛利幾之進（吉敷毛利）を総督とする遊撃隊を小瀬川に駐屯させて、芸州口の主力としました。

○戦闘はどのように経過したのでしょうか。

大竹口における戦闘は、岩国勢と井伊勢の間で六ツ時（午前四時半頃）に開始されました。その頃遊撃隊は隊を三つに分け、一隊は中津原から川沿いに大竹村に至り、一隊は立戸山を越えて敵の側面を衝き、一隊は苦の坂を直進して榊原勢を迎え撃ちこれを後退させ、小方へ進みました。

征長軍は海上からも幕府の軍艦が新港を攻撃し、幕府が誇る歩兵隊を投入する手筈でしたが、結局この日の戦闘には参加しませんでした。一説に、萩本藩と岩国領との離間工作を行っているうち、時機を逸したと伝えられています。大竹口では岩国勢と彦根勢の間



「芸州小瀬川合戦略図」（『増補改訂和木町誌稿』）をもとに作成

で激しい戦闘が行われ、その砲撃によって、和木村では火災が発生しました。しかし遊撃隊が彦根勢の側面から攻撃を加えると、彦根勢はたちまちにして崩れ始めます。苦の坂を越えた一隊も彦根・榊原勢の後方を突いて攻撃しました。大竹村では一千余の家屋が焼け、そのなかを彦根・榊原の軍勢が、算を乱して逃げ惑いました。彦根・榊原勢が逃走した後には、おびただしい数の甲冑や大砲・小銃・槍などの武器や日用品が散乱していました。

この日長州軍は、小方からさらに玖波にまで攻め込んで、本陣を守る彦

根兵と交戦、これを敗走させた後、兵を収めました。玖波が落ちたのはおおよそ昼頃、ここでも村の約半数が焼亡しました。

○長州軍は勝てると思っていたのでしょうか。

当初、この小瀬川口の戦闘は、相当な苦戦が予想されていました。岩国領主吉川監物は、敵兵を岩国城下に引き受ける覚悟で戦いに臨んだと伝えられています。また遊撃隊参謀河瀬安四郎の報告書は、その冒頭に「此度の大勝利、実に意外に出候」と述べています。

○長州軍がこの戦闘に勝利したのは何故ですか。



「小瀬川戦争私記」岩国徴古館蔵（岩国市）

岩国の藤田葆（一八三〇—一九二二）が、大正二年（一九一三）にまとめた「小瀬川戦争私記」の記事には、この勝利の要因として、まず幕府軍の指揮官の実戦経験不足を挙げています。一方井伊家や榊原家は、天誅組の変や禁門の変に参戦しましたが、そこで勝利を得たためにかえって軍制・装備の見直しが遅れ、旧態依然の軍装を踏襲したままこの戦争に臨んだことを指摘しています。

翻ひろがえつて長州軍諸隊は、仕官から軽卒たつげばがまにいたるまで、黒い筒袖の上着に立付袴たつげばがまという軽装でした。これは幕

府歩兵隊にも採用されていた軍装で、洋式の砲銃戦に適した動きやすいものです。禁門の変での敗戦、さらには元治の内訌を経ることによって、長州藩が抜本的な軍事力の改編に取り組み、徹底した洋式銃隊化を図っていることの象徴とも言えるでしょう。

戦闘現場から遊撃隊参謀河瀬安四郎が山口政事堂に宛てた戦闘報告によると、彦根軍の大砲による攻撃力は、遊撃隊が想定していた以上に高かったようです。その一方で、小銃の撃ち合いでは長州軍が圧倒的優位を占め

たと書いています（毛利家文庫六六 四境戦争七「芸州口戦争記参考」山口県文書館蔵）。この戦闘で長州軍は数多の分捕り品を得ますが、小銃は数が少ない上に、あったとしても旧式のヤーゲル銃や和銃を改造したものでした。これらの銃は、長州軍諸隊が主として装備するミニエー銃と比較すると、射程距離や命中精度に大きな差がありました。



アンペール『幕末図説』に描かれた「大君の戦士」（『日本の砲術—和流砲術から西洋砲術へ—』（板橋区立土資料館図録2004）より）

この河瀬報告書は、さらに「味方の兵山々谷々を駆廻り進戦の形容、中々言語には尽くせざる次第」と、長州軍が道なき道を駆け回って奮闘した様子を伝えています。その際、筒袖の上着に立付袴という軍装が、その行動にすこぶる便利であったことは、容易に推察されます。

このように、軍事力の洋式銃隊化、使用する小銃の性能如何が、両軍の勝敗を分けた大きな要因であったことが確認できます。

○幕府側はどのように分析していたのですか。

敗走した井伊家が幕府に提出した「彦根藩届書」（『新修彦根市史 史料編 近代』所収）では、その原因を次のように述べています。

① 敵勢約三百人が、小瀬川を渡って芸州側の太竹山より攻撃を加え、味方一手隊の後方をふさいでしまいました。

② 二手隊・三手隊は、油見村で激しい戦闘となり、三方を囲まれ苦戦しているにもかかわらず、幕府の歩兵隊は新港を攻撃することもなく、応援もありませんでした。

③ 苦ノ坂へ出張した一隊は、敵勢が先に頂上を取って大小砲を打ち下ろし、且つ道の両脇樹間より激しい砲撃を受けたため、持ちこたえることが出来ずに小方村まで後退しました。

④ 山の麓や海辺での戦闘に苦戦し、且つ帰途に当たる村々は焼き尽くされ、軍勢は進退窮まり、器械類も破損したため、本営を守備する意義も薄れ、広島まで退却することを決定しました。

ここから、長州軍は地の利を生かして彦根軍の側面や後方からも攻撃を加え、前軍と後続の間を分断するとともに、退路を断つことに成功したと、散兵を巧みに利用して銃撃戦を有利に導いたことが窺えます。また、そのような中で苦戦を強いられた彦根軍を、幕府軍が援護しなかったことも敗因として挙げられています。

○戦闘に参加した兵士は長州軍をどう見ていましたか。

彦根に近い近江八幡の商人で、尊攘の志士としても活躍した西川吉輔が書きためた「吉介翁自筆見聞雑記」(滋賀大学経済学部附属史料館寄託 真崎文庫、資料提供 山口県史編さん室)の中に、実際に戦闘に参加した彦根藩士や農兵の談話がいくつか出てきます。七月十三日条には、長州軍の捕虜になった農兵が、酒と食事、さらに帰国のための路銀五百疋を受け取って国境で解放されたという記事があります。その農兵は、待遇は丁寧で行届いたものであった。ましてや軍備・軍令等が行届いてはもちろんのことで、そこに攻め込むなどということはそう簡単に出来ることではない、と語っています。また同日条に農兵の話として、長州軍が埋設した地雷火に非常な恐怖を覚えたとあります。

軍備・軍令については、七月十五日条にも「長防人は強壯豪勇、中々以て敵対すべからず、彼国の武威凛乎、武備充実、軍令行届きたる事は、異口同音に是を賞歎す」(読み下しー上田)という彦根城下の巷説が出てきます。この時の彦根城下は、自軍の敗北について噂することは憚られる状況でしたが、一方で敵方である長州軍については、異口同音に賞賛しているということなのです。

またこの戦争で活躍している長州軍が、武士以外の身分も含めて構成されていることを伝える記事も散見されます。これらの記事では、武士だけでなく、他の諸身分までも兵卒として編成した長州軍が、征長軍に四方を囲まれてもお士気の高いこと、軍備の充実はもちろん、軍令も徹底して統制がとれていること、捕虜にも人道的な対応を施す節度ある軍隊であることなどが語られています。そしてこれらの情報は、征長軍惨敗のニュースとともに、日本全国に向けて発信されていたのでした。

次の機会には、戦場になった村々の様子について紹介する予定です。

◆企画展等情報◆

▼パネル巡回展

山口県が生んだ8人の宰相展

県政資料館旧県会議事堂において開催しました「山口県が生んだ8人の宰相展」のパネルを県内七地域で巡回展示しています。今後の開催地域、開催時期及び開催場所は次のとおりです。詳しくは、県政策企画課(〇八三一九三三一二四二〇)にお問い合わせください。

地域名	開催時期	開催場所
柳井地域	十二月 四日(月) ～十日(日)	アクティブ柳井(視聴覚室)
岩国地域	十二月十八日(月) ～二十四日(日)	シンフォニア岩国 (企画展示ホール)

▼萩博物館(萩市大字堀内三五五 電話〇八三八二二五一六四四七)

幕末志士たちの手紙展 一山根正次コレクション

(平成十八年十二月十八日～平成十九年四月八日)

明治から大正にかけて医学者・政治家として活躍した萩出身の山根正次(一八五七～一九二五)が収集した貴重な資料群が、ご子孫のご厚意によりこのたび萩博物館に寄贈されました。

本展覧会では、その良質なコレクションから、吉田松陰をはじめ久坂玄瑞や高杉晋作など幕末維新期に活躍した志士たちの手紙を中心に紹介します。志士たちの「生の声」を感じ取ってください。観覧料は大人五百円、高校・大学生三百円、小・中学生百円です。

〔あながき〕第二号の維新史回廊だよりを無事お届けできて、安心しました。今回は、四境戦争を、長州藩側だけでなく幕府側の報告書からも分析してみました。いかがでしたか。次号は来年二月発行の予定です。

維新史だよりの内容は維新史回廊のホームページ(<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/bunka-s/ishin/index.html>)でもご覧いただけます。